

佐藤一晴さんを偲んで

会員のひろば

飯島信吾（東京都 / シーアンドシー出版）

佐藤一晴（さとう・かずはる）さんが2002年1月27日、胃がんのため東京都新宿区中落合3の26の14の自宅で死去しました。

佐藤さんのプロフィールは以下の通りです。

1932年生まれ。61年正路喜社労組委員長。72年から日本演奏家協会に勤務。同副書記長を経て、83年に同協会と日本音楽家労組との合同による日本音楽家ユニオンの結成に参加、事務局次長・同局長を95年まで務めました。72年に始まった日フィル争議で重要な役割を果たし、音楽家の生活と権利擁護のために奮闘しました。日本ジャーナリスト会議運営委員。

著書に『間奏曲』、共著に『労働争議』など。

佐藤さんは、協同総合研究所がまだ生まれない頃、日本労協連が中高年雇用福祉事業団と名乗っていた時代から、「協同を問うプレ集会」（伊東集会1987年）に参加しています。

私が初めてあったのは、30年前の「報知新聞・印刷争議」の時で、まだご本人も自分の「正路喜社争議」の終盤のたたかいを指導していた時期でした。背のストラットしたインテリだなーという感じをもったことを覚えています。

『東京争議団物語』（労働旬報社刊）を東京地評の市毛良昌さんらと集団討議して、執筆した人だと先輩から教えられていました。正路喜社の争議では、当時の著名な堀江正規さんや中林賢二郎先生などと「争議の社会的・経済学的分析」を試みられ、争議解決でも社会的包囲論や背景資本の責任追及・丸の内総行動（日経連・経団連）などを豊かに生みだしたリーダーでした。

争議解決後は、音楽家ユニオンに参加し、職能別ユニオンをこの分野で生み出す原動力になった一人でもあり、プロフィールで紹介されている日本フィル争議の解決にむけて、重要な役割を果たしたことは間違いありません。

その間も争議に関係した労働者、弁護士グループと東京争議研究会をつくり、その幹事として、毎月の研究会を組織する一人でしたが、成果は『労働法律旬報』に掲載されています。この研究会が終わって、毎回、お酒をご一緒させていただいたのが、記憶にあります。とくに新宿界限では、仲間のユニオンメンバーが出演する、ナマバンドのジャズを聞くのが好きなようでした。

80年代に黒川俊雄（慶応大学名誉教授）先生を中心に地域コミュニティ・労働者協同組合研究会が始まった頃、大変興味をもっておられ、「新しい酒は新しい革袋が必要だな」

とってくれたのを覚えています。

協同総合研究所には最初から参加して、これまでの協同集会には毎回、参加していたと記憶していますが、96年の仙台集会の時に「労協もやっとNPOや市民層と接点を持ち始めた」と話し合ったのを覚えています。

最後の飲み会は、3年前、大塚で林丘さん（コンピュータユニオン）と一緒に「職能別ユニオンとワーカーズコープについて」話し合ったのを記憶しています。

両者も彼にとっては、“ヨーロッパにあって日本にないモノ”で、労働者の成長・発達には欠かせないモノという認識をもっていたと確信できます。

後につづくものとして、ほんとうに残念、という思いをしております。深く合掌させていただきます。

